



発行
長崎県高等学校教職員組合
〒850-0013 長崎市中川2丁目2番5号
長崎高教組会館
☎ (095)-827-5882
Fax (095)-826-2976
編集責任者 佐藤真一郎
購読料 一部10円
組合員は組合費を含む
メールアドレス
naga-kks@fsinet.or.jp



職場の声を聞き、仲間を増やそう 2022年度「変化のはじまり」



2022年度長崎高教組執行委員長 鍛冶保則

新年度が始まり、新学期の準備で忙しい日々をお過ごしのことと思います。2022年度は職場が大きく変化する始まりの年度となりますので、組合員の皆さんにはぜひ、職場の中心となって校務に組合活動にと励んでいただきたく思います。まず、新学習指導要領が導入され、成績評価のあり方が学年進行で変わります。職場の

準備はお済みでしょうか？そして、県教委が導入した「新しい人事評価制度」の試行の年にもなります（県教委は「試行」という言葉は使いませんが、実質試行です）。「職場に判断と差別を持ち込むような制度ではない」と県教委は言っていますが、本当にそうなのかは、職場の皆さんが立てた目標についての管理職との面談のあり

方で明らかになると思っています。この2点だけでも職場の皆さんには大きな負担になるものと思われませんが、そこへ「加配などは将来的に減らしていく」という人事異動時の発表です。多忙化が進む職場で、病欠休職も増える中、職場の皆さんの要求は「とにかく人を増やしてほしい」というものなのに、それに逆行する方針を打ち出す県教委を許していいものでしょうか？教職員が足りていない「職場に穴があく」状況がいくつかの学校で報告されています。このような学校はこれからも増えることが予想されます。こうした状況を変えるためには、職場から声をあげるしかなく、そ

ゆきとどいた教育をもとめる 22春闘共闘街宣行動より



22春闘に向け、アピールする県労連 3/10 夕刻 鉄橋にて

3月10日、浜の町アーケード入口の鉄橋にて、22春闘「山場の行動」として、高教組は県労連の他の労組と共に街宣アピールに参加しました。高教組の「ゆきとどいた教育を求めろ」アピールに一人の通行人が、野次を飛ばしてきました。高教組の考

えに一定のアンチがいるとして、彼らの耳に私たちの訴えも入らなければ、野次も飛んでこないでしょうし、心に響かなければ、行動に移すこともありません。それがどんなリアクションであろうと、意義がある反応と捉え、

アピールを終えました。左は、長崎高教組書記長佐藤がおこなったアピール要旨です。「3月8日の新型コロナウイルス感染者の399人のうち半数は10代の若者でした。クラスターが発生する場所として、教室はリスクが高い場所の一つです。授業中ほとんどもかく、休み時間になれば、子ども達は、近い距離でおしゃべりをします、身体接触があります、そういう空間です。20年度、この感染が拡大した結果、国はようやく35人学級に舵をきり、県は、その教育予算を組みまし

これからの長崎高教組を語る

全県分会長・支部代表者のつどい青年教職員交流会を開催

コロナ禍の中で2年間開催できなかった全県分会長・支部役員会議を4月2日に高城会館(諫早市)で開きました。県下各地から25人が参加しました。

この会議は新しく分会長や支部役員になった人が抱負や課題を語り、課題の共有や組合活動の楽しみ方を確認し、明日からの組合活動を元気にとりくんで

全体会に続き、5つの分散会を行いました。分散会には参加者を青年女性、定通、障教の専門部と一般に分け、各専門部の課題やこれからの高教組のあり方を交流しました。分散会の概要は次です。



●青年部



全県分会長会・支部代表者のつどい並びに青年教職員交流会の参加者

3人が参加しました。組合に加入した理由やこれからの抱負などを語り交流しました。参加者の一人は加入した理由を「働きやすい労働環境が整えられてきたのは組合が交渉などを通して作ってきたことを知り、『フリーライダー(ただ乗り)』ではよくないと思ったこと、自分も組合の先輩方のように仕事を同僚に見せ加入につなげたいと思う。」と語りました。また昨年度の確定交渉に参加した人は「県教委に青年教職

4人が参加しました。産休代替が見つからないなど人がいない事で深刻な状況が生じている現状や学校の業務が増えすぎ組合活動との両立が難しくなっていることなどが報告されました。拡大の話題では、全教が、青年教職員の声の聞きとること、そこから拡大につなげる運動を提起していることが紹介されました。参加者の職場では未組も交えて集まる機会をつくっている報告があり、それを他の職場にも広げていく展望も語られました。



●女性部



●定通部

3人が参加しました。生徒数減少、教職員数の不足、新しい高校入試制度の影響など、定時制・通信制課程が直面している問題を、参加者の職場の状況を踏まえ考える場となりました。



●障教部

2人が参加しました。始業時間から子どもたちが下校するまで休み時間をとれない現状、特別支援学校の児童生徒数が増えるなか教職員数は不足していること等、厳しい労働環境が報告されました。国を動かし設置基準を改定させたことは拡大の声かけの話題になったことも報告がありました。障教部の全国学習



2月20日15時から高教組会館にて講師に牟田万希子氏を迎えて15名が参加し長崎支部教研が行われました。

長崎支部教研 不登校経験・NZでの体験発表

講師自身の不登校の経験とニュージーランドでの体験を中心にした内容でした。「中学1年の10月に1週間休んでから不登校になり、不登校になった理由は自分でもわからない。部屋にこもっていたが、中学2年からは外出したり、保健室登校とか職場体験に参加できるようにになった。不登校から抜け出したのは母が受け止めてくれたか

ら。当時は学校に行っている自分が自分であり、学校に行かなくなると自分は自分ではないと感じていました。シャツジしない人、話を聞いてくれる人、指導的な立場から言わない人、向き合ってくれる人、見守って待ってくれる人がよかったです。中学3年からニュージーランドに行った。ニュージーランドで自分らしさを感じられるようになった。日本は『同じ』が当たり前でした。しかし、ニュージーランドでは他人を受け止めることの大切さ、『違う』

交流集会や教育のつどいに参加した参加者は「勇気づけられた」と話し、組合がそこにあるということの大切さや未組への声かけ対話の継続を確認しました。

8人が参加しました。分会長や支部役員を歴任してきたベテランの組合員ばかりで、これからの高教組のあり方として、組合員数に見合った組合運動も検討することが求められるのではと課題が提起されました。新しい分会長や支部の役員に、組合活動をすすめる中に



団結ガンパローを行う参加者



2/20 高教組会館4Fでの長崎支部教研の様子

のが当たり前で、多国籍の人がいて判断基準が異なり、とけこめる雰囲気がありました。講演には不登校の子を

持つ保護者も参加しており、多くの質問や活発な意見交換が行われました。

楽しみがある事を知らせたいと参加者の経験に裏打ちされたエールが贈られました。分散会報告の後、全体討論の時間をとり、

3人があらためて高教組を持続可能な組織にするための抱負を語り、鍛冶委員長の団結カンパローで会を閉じました。